

2024. 7. 14 (日) 使徒17:1~9

17:1 パウロとシラスは、アンピポリスとアポロニアを通過して、テサロニケに行った。そこにはユダヤ人の会堂があった。

17:2 パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。

17:3 そして、「キリストは苦しみを受けて、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。

17:4 彼らのうちのある者たちは納得して、パウロとシラスに従った。神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様であった。

17:5 ところが、ユダヤ人たちはねたみに駆られ、広場にいるならず者たちを集め、暴動を起こして町を混乱させた。そしてヤソンの家を襲い、二人を捜して集まった会衆の前に引き出そうとした。

17:6 しかし、二人が見つからないので、ヤソンと兄弟たち何人かを町の役人たちのところに引いて行き、大声で言った。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。

17:7 ヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と言って、カエサルに背く行いをしています。」

17:8 これを聞いた群衆と町の役人たちは動揺した。

17:9 役人たちは、ヤソンとほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。

<説教>

使徒パウロたちによって主イエス・キリストの福音がアジアから初めてヨーロッパに伝えられ、まずピリピにキリスト教会が生まれました。ピリピの町から立ち去るとき、パウロとシラスはたちはリディアの家に行き、主にある兄弟たちを励ましました(16:40)。パウロたちが立ち去った後もピリピの教会はパウロたちを支援しました(ピリピ 4:15-16)。そのピリピ人への手紙にも地名が書かれているように、パウロたちがピリピを出てから次に福音を宣べ伝え、教会が建てられたのがテサロニケでした。

ピリピから〈アンピポリスとアポロニアを通過して、テサロニケ〉(17:1)は160 kmくらいの距離です。テサロニケは当時ローマ帝国のマケドニア州の首都で、ピリピに比べるとはるかに多くのユダヤ人もいたようです。それでそこにはユダヤ人の会堂がありました(1)。

それで〈パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合〉いました(2)。会堂にはユダヤ人はもちろん、〈神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たち〉(4)つまり異邦人たちも集っていました。〈聖書〉とは今で言う「旧約聖書」です。会堂に集っていた人々は〈聖書に基づいて〉、神がキリスト(即ちメシア)を救い主としてこの世に送ってくださることを待ち望んでいました。それで、これまでもそうだったのですが、パウロは〈聖書に基づいて〉キリストとはどんなお方なのか、そしてそのキリストとは誰なのか、〈彼らと論じ合〉いました。なお〈三回の安息日にわたって〉とは安息日だけ三日間とは限らず、〈論じ合〉い、〈説明し、また論証〉(3)するべき事柄の重要性から考えると、「三回の安息日

にまたがった期間、延々と」と見るのがいいかもしれません。いずれにしても、大事なことは、主イエス・キリストの福音を人々に語り伝えるには、〈聖書に基づいて〉したことです。それはこれまで「使徒の働き」で学んできたように、パウロに限らず、ペテロを初め、すべての使徒またピリポなどの伝道者がしてきた、言わば「唯一の」方法でした。もちろん現代では〈聖書〉とは旧新両約聖書となります。

そのように〈聖書に基づいて〉パウロは〈「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証し〉ました(3)。〈説明〉とは、文字通り「説き明かす」ことです。復活の主イエスがエマオの途上で弟子たちにやはり〈聖書に基づいて〉ご自分のこととお話しなされたことをあとで弟子たちが「(主が) 私たちに聖書を説き明かしてください」と言ったときの〈説き明かし〉です(ルカ 24:32)。聖書に書かれていることの本当の意味の「説き明かし」です。そして〈論証〉とは「聖書に書かれていることを証拠として並べる」という意味です。そのように〈聖書に基づいて〉、キリスト・イエスのことを〈説明〉し、聖書に書かれていることを証拠に〈論証〉するのは、「三回の安息日にわたる」ほど時間がかかること、話す方も聞く方も忍耐を必要とし、またよく考えることも必要とされることです。それは非常に地味であり、華やかではなく、人の目を引くものではないでしょう。しかしそれが一番基本的で、結局は確実な福音宣教の方法なのです。

ユダヤ人たちにとって「苦しみを受け、殺されるメシヤ(キリスト)」などあり得ず、信じられませんでした(ペテロもパウロもかつてはそうでしたが)。その意味で、死者の中からよみがえるメシヤもあり得ないこととなります。そんなユダヤ人たちの聖書理解しか教えられていなかった異邦人たちでした。そんな彼らにパウロは、聖書をよく読んで、正しく解釈するなら、まず「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです」と説明し、論証しました。そして、ではその聖書に書かれている、あるべきキリストの姿と完全に一致したお方は「私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそ」なのだと説明し、論証したのです。

このいわば「直球、ど真ん中勝負」のパウロの伝道を通して、やはりここでも主が彼らの心を開いてくださいました。〈彼らのうちのある者たち(おそらくごく少数のユダヤ人たちのことでしょう)〉、そして〈神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たち〉が〈納得し〉た、つまり「苦しみを受け、死者の中からよみがえられたイエスこそキリストだ」と信じました。そして聖書を正しく説き明かす〈パウロとシラスに従った〉、のです。

こうして「ユダヤ人会堂派」から「イエス・キリスト派」に人々をごっそりと引き抜かれてしまった〈ユダヤ人たちはねたみに駆られ〉、パウロたちを迫害することになりました。それは何とも意地悪く、暴力的なやり方でした(5)。〈ヤソンの家〉がパウロとシラス、そしてイエス・キリスト派に鞍替えした人々の集まる場所となっていたのでしょう。

しかし、二人が見つからないので、ユダヤ人たちはヤソンと兄弟たち何人かを捕まえ、町の役人たちのところに引いて行きました。でもそうする正当な理由もなく、自分たちのねたみが理由だとも言えず、ありもしない理由をでっち上げて訴えました(6-7)。「パウロとシラス、またヤソン、そして会堂から出て行ったユダヤ人、ギリシア人たち、イエス

・キリスト派は『イエスという別の王がいる』と言ってローマ皇帝の命令に背く行いをしている」と。かつてエルサレムで、イエス・キリストご自身について同じような訴えをユダヤ人たちがピラトにしたことが思い起こされます。〈集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」〉(ルカ 23:1-2)。今やイエスをキリストと信じ、告白する人々も、信じない人々から、イエスと同じように訴えられるのです。それは今の時代も、そそしてこれからも変わらないことでしょう。

〈これを聞いた群衆と町の役人たちは動揺しました(8)が、ここテサロニケの役人たちはピリピの役人とは違って、手荒いことはせず、〈ヤソンとほかの兄弟たちから保証金を取ったうえで釈放した〉)のでした(9)。

「『イエスという別の王がいる』と言っている」とは、ねたみに駆られたユダヤ人たちの動機、悪意から出た言葉という意味では、言いがかりであり、間違いです。しかし、イエスを神の約束のキリスト、神の子、救い主と信じる者、パウロたち、私たちにとっては本当です。イエスはどの時代のどの国の支配者に遙かに優る、彼らをすべてご自分の下に置き、支配なさる真の王、「主の主、王の王」です。私たちも、このキリスト・イエスだけに救いを求め、信仰し、希望を置かなければなりません。「私たちの罪のために苦しみを受け、十字架で死なれ、死者の中からよみがえらなければならなかった」キリスト・イエスを私たちも聖書に基づいて論じ、説明し、論証していくように。ますます熱心に聖書を読み、祈りつつ歩んで行きたいと願います。